

ジョン万次郎・平野廉蔵と小笠原諸島

—幕末維新期の洋式捕鯨をめぐる一考察

後藤 乾一[†]

John Manjirō, Hirano Renzō and the Ogasawara Islands:

A Study on Western-style Whaling in the Late Edo Period

Ken'ichi Goto

The Ogasawara or Bonin Islands and the internationally famous “Japan Ground” with its sperm whales were a major center for international whaling after the early 19th century. In particular, Chichi-jima, where the first Westerners and the Kanaka ethnic group from Hawaii settled in 1830, took on important functions as an essential watering and fueling post for Western whaling ships in the area north of Guam and Saipan.

During the long period of “the closed country” policy, Japan restricted foreign interactions, however after lifting the restrictions in 1860s, the Tokugawa Shogunate engaged in continual negotiations with both Britain and the United States over territorial rights to the islands. In addition, Japan started pursuing economic profit in this region, adapting modern whaling technology from other countries, and gradually considering the islands as a vital front line for coastal defense.

Based on this international environment and Japanese foreign policy, this article empirically examines the following two issues. First, it explores the actual conditions of whaling in the late Edo period (and the dawn of the Meiji period), with special attention to the role of John Manjirō, a castaway who advocated adapting modern whaling technology and was appointed as the government official for whaling, and Renzō Hirano, a wealthy shipping agent from Niigata prefecture. Second, the article examines the socio-economic meaning of whales and whaling for the Ogasawara islands, which Japan officially possessed from 1876.

はじめに

昨 2016 年 10 月から 12 月にかけて、外務省外交史料館において「特別展示 幕末へのいざない」が開催された。その企画の中で、幕末期の外交文書集成として知られる膨大な『通信全覧』（計 320 冊）、『続通信全覧』（計 1784 冊）に収められている関係史料をもとに「小笠原島への巡検」と題した展示も幕末外交の重要な一コマとして紹介された⁽¹⁾。

明治政府が小笠原諸島の管治（領有）を各国駐日公使に通告するのは明治 9(1876)年 10 月 17 日のことであるが、幕末期においては同諸島の帰属をめぐる主に英米両国とのきびしい外交折衝が繰り返された。後述するように幕府は文久元(1861)年末、外国奉行水野筑後守忠徳を長とする小笠原

[†] 早稲田大学名誉教授

諸島「回収」のための調査隊を派遣した。この「回収」という言葉が用いられたのは、本来日本の「固有の領土」であるにもかかわらず、現実には他国が領有権を主張し、あるいは1830年以降、同島に欧米系住民・カナカ系（太平洋諸島の諸民族の総称）住民を構成員とする小規模ながら定住者社会が実在していることについての認識があったためである。幕府が「回収」を唱えたのは、同諸島への漂流から自力帰還を遂げた紀州船一行の証言をもとに延宝3(1675)年長崎代官末次平蔵の船頭、堺出身の島谷市左衛門らを現地巡検させ、そこに「此島大日本之内也」と記した標識を建てたことを根拠に「無主地先占」の権利を主張したためだった。しかしながら、欧米諸国とりわけイギリスは、幕府がそれ以降小笠原諸島を放置したままであり、何ら実効的な統治も開発も行っていないことを理由に日本の領有権を否定しようと試みたのであった。水野一行総勢90余名を乗せた咸臨丸の派遣は、そのような国際環境下での「回収」事業の具体化であった。

この「回収」と同時に幕府は、領有権の裏付けとするべく「開拓」事業に向けての着手も視察団の任務とした。そしてその「開拓」の重要な柱の一つとされたのが、同島周辺海域における捕鯨であった。捕鯨の必要性は、水野視察団に通訳（兼航海術専門家）として加わった元漂流民ジョン万次郎がかねがね幕府上層に建議していたことであった。しかも万次郎はその3年前、「鯨漁御用」としての地位を幕府当局から与えられていた。本稿は、幕末期小笠原諸島をめぐる論議の中で重要な政策課題となっていた捕鯨を、それに深く関わったジョン万次郎ならびに平野廉蔵という二人の人物の軌跡を追う形で試論的に考察するものである。

ジョン万次郎こと中浜万次郎(1827-1898)と平野廉蔵(1829-1882)、二人は今日その知名度において天と地ほどの差があるものの、ともに江戸時代後期に生まれ、幕末維新期の激動をそれぞれの才覚と努力によって生き抜き、近代日本の黎明期に異彩を放った人物である。万次郎は太平洋に面した土佐西部の小さな漁村、中の浜(現高知県土佐清水市)の貧しい漁師の子として生まれた。14歳の少年時代に漂流漁民として仲間とともに鳥島で米捕鯨船に救われた後、その船長に見込まれ10年にわたる稀有の異文化体験をもったことで知られる。この体験を通じ、数学や天文学を駆使した航海術、造船技術、捕鯨技能を習得した万次郎は、帰還後は語学を武器に通訳として幕末外交の現場に立つとともに鯨漁御用として日本における近代捕鯨の基盤づくりに貢献した。万次郎については、漂流から帰還した当時を含め日米両国で汗牛充棟ともいえるほどの評伝、啓蒙書、研究書等が出版され、その中で研究史的にも相当の蓄積が残され今日に至っている。

他方、万次郎と対照的に、日本海を前にした北越村松浜(現新潟県胎内市)の富裕な廻船業者の家に生まれ、若くして長崎、江戸に遊学した地方知識人平野廉蔵は、江戸で江川坦庵(英龍、第36代太郎左衛門)が開いた英学塾で万次郎から英語を学んだことを契機に、2歳年長の師と終生変わらぬ信頼関係で結ばれる。この万次郎との関係を通じ平野は、新興アメリカの近代文明の諸成果を学び、産業や技術の重要性に目を開かれた。ともに海と親しみながら育った二人にとって、おそらく捕鯨は共通の関心事であったことと思われる。この邂逅を通じ両者は、日本における最初の洋式捕鯨の実践に乗り出すことになる。その捕鯨活動の主舞台となったのが、小笠原諸島及びその周辺海域であった。いわば鯨を介して南国土佐人中浜万次郎と北国越後人平野廉蔵が、運命的な出会いを持つことになった。ちなみに万次郎の郷里土佐では「鯨一頭で七里栄える」といわれるほど鯨は貴重な生物資源であった。また平野の出身地越後には、鯨波、稲鯨といった鯨にまつわる地名も多く、鯨がかつて

人々の生活に密接に関わっていたことを物語っている⁽²⁾。

1. 洋式捕鯨の導入

18世紀後半以降、世界の捕鯨業の中心は、ヨーロッパ諸国から独立まもないアメリカに移っていた。万次郎を救助したジョン・ホーランド号のW・ホイットフィールド船長の出身地マサチューセッツ州フェアヘヴンも、ナンタケット島、ニューベッドフォード等とともに殷賑をきわめる捕鯨基地として知られた。これらニューイングランド沿岸の捕鯨基地を出港した大型捕鯨船が太平洋に達し、常陸、三陸沖を中心に日本近海にも姿を現すのは1820年代以降のことであった。その嚆矢は1819年6月、ナンタケット籍のマロー号である。米捕鯨船は母港を出てから出漁を終え帰港するまでしばしば3,4年を要したが、万次郎らを救ったホーランド号も、1839年10月にニューベッドフォードを出港し、2761バレルの抹香鯨油を収獲して帰港したのは3年半後の1843年5月のことであった⁽³⁾。

当時欧米世界では鯨油は蠟燭の原料、灯油、機械油として、石油発見(1859年、ペンシルベニア州)まで最も重要な燃料資源、生活物資であった。とりわけ良質の鯨油を産することで知られるマッコウクジラ(抹香鯨)は欧米捕鯨船の最大ターゲットであった⁽⁴⁾。アメリカの捕鯨が全盛期にあった19世紀中葉を背景とし自身も捕鯨船乗組員であった作家H・メルヴィルの『白鯨』は、巨大なマッコウクジラとの壮絶な物理的かつ心理的な格闘を臨場感あふれる筆致で描いた名作である。それはまた日本の各地にみられる伝統的な捕鯨技術、さらには鯨と人との関係性についての文化とは大きく異なる洋式捕鯨の本質を仔細に描き出している。ジョン万次郎は、そうした洋式捕鯨を身をもって体験し、それがもたらす莫大な利益と高度の航海術の魅力にとりつかれた最初の日本人であった⁽⁵⁾。

太平洋における欧米諸国の捕鯨の最大の中継地は、捕鯨船に乗り込んだジョン万次郎もたびたび寄港したハワイ諸島オアフ島のホノルルであった。そのハワイ諸島から操業海域を西方へと広げた欧米捕鯨船にとって、小笠原諸島とりわけ父島二見港はグアム、サイパン以北の「最後の薪水補給港」として1830年代以降重要な位置を占めた⁽⁶⁾。小笠原諸島が最終的に日本の主権下に組み込まれるのは明治9(1876)年であるが、そこにはすでに1830年にハワイを出港した、欧米に出自を持つ5人の男子、および彼らにリクルートされた20人(男7人、女13人)のカナカ人が、最初の居住者として移り住んでいた。その後もこの海域での捕鯨業の隆盛につれ、小笠原諸島には「入植者・逃亡者・漂流者・掠奪者」等多彩な背景をもった人々の出入りがあり、その一部は定住していった⁽⁷⁾。彼ら初期の定住者は、寄港する欧米諸国の捕鯨船を相手に食糧や生活必需品を提供するなどし、小規模ながら自立的な経済生活を営んでいた。日本は領有権獲得に際し、彼ら先住者の経済的既得権を承認することを条件に欧米諸国を納得させたのであった。

距離的にみれば、この諸島に当時領土的関心を示したイギリスやアメリカ(ペリー艦隊)に比べ、日本からの方がはるかに近いというもの(東京・父島間は約1000キロ)、また幕府は帰還した難破船の情報をもとに1675年巡検使を派遣し日本領として認識していたものの、それ以上の具体的な進出を試みることはなかった。しかしながら、天保10(1840)年漂流先の小笠原諸島から帰還した陸奥国小友浦(現岩手県陸前高田市)の船頭三之丞らから聴取した情報、訳出されたペリー日本訪問記、さらには長崎のオランダ商館からもたらされる『オランダ風説書』の情報等から、同諸島には欧米系、

カナカ系を中心とする定住者が存在することを知られるようになる。さらに1851年帰還し幕臣となっていた万次郎がもたらしたナマの情報も、幕府の憂慮と関心を一層深めたものと思われる⁽⁸⁾。万次郎自身は後述するように米捕鯨船フランクリン号乗組員として弘化4(1847)年5月、父島に10日間ほど滞在した経験をもっていた。この時の経験が、後年幕府の「鯨漁御用」に任じられ小笠原近海での捕鯨に関与する伏線となった。

文久元(1861)年12月に至り、前述したように幕府は外国奉行(1858年海防掛から改称)水野筑後守忠徳を団長とする視察団を小笠原諸島へ派遣し(「伊豆国付島御備向取調並二小笠原島御開拓御用」)、「回収」の第一歩を踏み出した。翌年4月に江戸に戻った水野はその復命書の中で、「回収」後の「開拓」において捕鯨業が重要かつ有望であることを建議した。そうした進言にもとづき、同月幕府は、全国に小笠原諸島近海での捕鯨を奨励する布告を出した⁽⁹⁾。水野視察団が乗った咸臨丸には中浜万次郎が通訳として加わったが、彼の体験に裏打ちされた進言が水野に一定の影響を与え、それが幕府の積極的な捕鯨振興政策につながったと考えられよう⁽¹⁰⁾。

2. 「鯨漁御用」としての幕臣中浜万次郎

ジョン万次郎の数奇な運命は開国直後の日本人に驚きの念で迎えられ、帰還直後の嘉永年間のみをみても『亜羅周遊奇談』『漂流万次郎帰朝談』『土佐漂流人口書』『万次郎物語』等数多くの関係読物が出版された。当時の相対的に高い識字率を背景に、庶民レベルでも広く流布したこれらの読物は、黒船来航以来とみに高まっていたアメリカはじめ異国への素朴な好奇心を刺激するものであった。

漂流少年漁師万次郎は、彼らを救助した捕鯨船長ホイットフィールド一家の庇護を受け、地元の小学校を卒業後バートレットの専門学校に進学し測量術や航海術を学ぶ。そして「養父」の影響もあり、早くから捕鯨を志すようになる。幸い太平洋捕鯨の全盛期であり、日本近海で操業予定のフランクリン号に乗船を許される。当初は事務員として雇われたが、やがて航海術、捕鯨技術さらには統率力が評価され、また英語でのコミュニケーションにも何ら問題なく、鉾手ついで一等航海士として活躍の場を与えられるようになる。フランクリン号は鯨を追い求め世界の海を航海するが、1847年2月にはオランダ領ティモール島西部(現インドネシア。東部はポルトガル領、現東ティモール共和国)クーパン港着、薪水や食糧補給のため約1ヵ月滞在する。おそらくティモール島に足跡を印した日本人の最初の記録といえよう。地元諸民族の他にオランダ人、インド人、「支那人」などからなる多民族社会を形成していることに興味を覚えるが、万次郎は「風俗は蘭領なれば自然オランダ化し居り⁽¹¹⁾」と観察している。

ティモール島を出港したフランクリン号は北上し同年3月グアム島を経て小笠原諸島の中心、父島二見港(ロイド港)に投錨する。10余年後、「鯨漁御用」として再訪することになるその島の印象を、万次郎は帰還後の証言の中でこう述べている。「此島近比迄無人島なりしが、今僅に裸島及び他の諸所より四、五十人許の人来り、之に居住し芋類の諸物を耕作すと云。渴留・十日にして水を取、これを出帆せり。此処にて四年前の事なりし、(欠字)日本の漂船あり。其船人等悉く死亡し、唯一名余見しを「イシハニシ」船に助命られ終に此に止りしが、其人共駆使れるの苦しさを厭とひ、独小船を盗乗其終る所を知るものなしと聞けり⁽¹²⁾。」

万次郎はフランクリン号をおりた後、ゴールドラッシュにわくカリフォルニアに赴き数ヵ月間働い

て大金を手にする。そして1851年、望郷の念やみがたくハワイに渡り、その地に残っていたかつての漂流仲間二人と上海行きのサラボイド号に乗り込む。同号が東シナ海に入り沖縄本島最南端の沖合を通った時、万次郎らは船長の了解をとりつけ、小舟に乗り換え摩文仁の小渡浜（現糸満市大度）に上陸する⁽¹³⁾。開国前夜のきびしい掟にしたがい「密出入国者」として拘束され、薩摩支配下にあった琉球王国（那覇）、薩摩、長崎と連行、長期にわたる取調べを受けた後、24歳となっていた万次郎は10年ぶりに生地中の浜に帰郷、母親ら家族、村人との再会を果たした。異国についての豊富な情報、航海術、捕鯨についての専門知識、そして高度な語学能力等を認められた万次郎は、土佐藩に召し抱えられ徒士格として末端ながら武士階級の一員に取り立てられ、藩の教授館に出仕した。万次郎はそこで英語やアメリカ事情を講じるなど、これまでとは異次元の世界への第一歩を印すことになった。

10年間故郷と絶縁し、異郷の地で生きた万次郎であったが、学校生活を含めアメリカ大陸で暮らしたのは約3年のみで、その2倍の歳月を捕鯨船上で過ごしたことになる。この点を重視する歴史社会学者石原俊は、「移動民」という概念を軸に小笠原諸島近代史を考察する中で万次郎の足跡に着目しつつ、基本的に「小笠原諸島に集まってきた人びとと共通した経歴を持つ移動民⁽¹⁴⁾」として万次郎を位置づけている。

本質的には主権国家の枠内に安住するよりも空間的にも精神的にも国家の束縛を好まない性格を有する「移動民」性を内包しつつ、万次郎はその特異な体験と能力の故に幕府＝「国家」が必要とする「定住者」へと変身していく。中浜姓を許され土佐藩に仕えて約8ヵ月後、江戸の幕府中枢から万次郎に召し抱えの通達がくる。その契機は、ペリー率いる米東印度艦隊が最初に来航した嘉永6(1853)年に海防掛として幕政に参加することになった蕪山代官第36代江川太郎左衛門（英龍、号坦庵）の要望であった。江川は林大学守あきら（号復齋）ら幕閣に対し、万次郎登用の進言を行い、その結果、同年6月22日付達書で老中阿部正弘は、江戸在住の土佐藩留守居役広瀬源之進を通じ万次郎の呼び出しを命じた。その令書は、「外国の様子等相尋候儀も可有之候間」、万次郎を江戸へ出立させられたしとの文面であった⁽¹⁵⁾。また開国派の儒者・砲術家大槻盤溪も、「土佐漂流人万次郎儀は頗る天才有之者⁽¹⁶⁾」と林大学守を通じ幕府に推挙していた。

蕪山を拠点に伊豆・駿河・相模・甲斐・武蔵にある幕府直轄地を管轄下においた江川英龍は、海防掛に任じられる14年前、天保10(1839)年、海防の急務を痛感する幕府の命を受け、目付鳥居耀蔵を正任とする江戸湾沿岸測量調査の副任をつとめるなど、つとに海防に深い関心を有していた⁽¹⁷⁾。この調査の正任となった鳥居には「御上下御同勢35人」、副任の江川には「御上下拾人」が配され、さらに測量方も加わるなど大がかりな調査隊が編成された。蕪山代官という地方行政官であった江川がこの役に任じられたのは、勘定所にあった開明派幕閣・川路三左衛門（聖謨）の推薦によるものであった。川路は同年12月3日夜付けの江川宛書簡の中で、「近來右之場所え度々異船渡来いたし候ニ付御備え様子御取調」を、と江川に打診している⁽¹⁸⁾。またそれに先立つ天保8年に江川は、「伊豆国御備場之儀ニ付存付申上候書付」と題した長文の建議書を勘定所に提出している。その冒頭には伊豆の置かれた地政学的位置に関連し、こう述べられている⁽¹⁹⁾。「伊豆之為州哉、南太平洋ニ張出、三面海ヲ環シ、北方纔カ接相駿、西ハ対駿州、東北ハ房州ニ相望、南ハ極天無際之大海ニシテ、七島及小笠原諸島ノ外、復一片之土壤無之、……誠ニ僻遠偏小之州」ではあるが、江戸防備の観点から海防上

きわめて重要な地位にあると強調する。さらに江川は捕鯨にも着目し、「大島沖には鯨多く御座候由、右ハ御手獵ニ相成候ハバ宏大之御利益可相成、右鯨油之江戸廻り之上、御払相成候ハバ、灯油の辨理も宜可相成奉存候」と述べるのであった。

19世紀に入って活発化する欧米諸国の日本近海への接近を見やりつつ、海防と捕鯨を不可分なものとする認識方法は、ひとり江川のみのもではなかった。後に江川塾の学頭を務める仙台藩出身の儒者大槻盤溪もその系譜に連なる知識人であった。そして、彼らの考え方に少なからぬ影響を与えたのが、『鯨史考』（全6巻、国立公文書館所蔵、1808年）の著者で盤溪の再従兄である大槻清準（仙台藩学校養賢堂学頭）であったといわれる。『鯨史考』の成立過程については森・宮崎著『鯨取りの社会史』で詳細に論じられているが、そこで引用された次の一節が、捕鯨と海防の関係を明快に示している⁽²⁰⁾。「地勢ニヨリテ海防ノ備ニハ鯨組ヲ設クルニ如ハナシ、無事時ハ、鯨ヲ漁シ、万事ノ出来ラン時ハ水戦ノ用ニ備ヘナハ、海防畢竟ノ武備ト言フベシ、凡船ノ堅固ナルコト鯨船ニ若クハナク、漕行コトノ疾速ナルコトモ亦鯨船ニ如クハナシ、コレ軍用ニ備ル究竟ノ船ナリ、鋤モ戈戟ノ用ヲナスモノナリ。」

また江川は、海防との関連で品川台場や葦山反射炉の築造、大砲鑄造、洋式艦船の建造など先進的な大事業に取り組み、「日本の産業技術近代化の一源流⁽²¹⁾」となった技術テクノクラートでもあった。そうした開明的技術官僚であり高島秋帆などから近代砲術を学んだ江川には、アメリカから帰還直後の万次郎はきわめて魅力ある存在に映じたと思われる。そのため万次郎の江戸到着を待って江川は、「(土佐山内侯の) 小人中浜万次郎私方え借請之儀ニ奉願候」と要望したのであった⁽²²⁾。

こうした江川の熱意がかない、万次郎は嘉永6年11月22日付で「御代官江川太郎左衛門手附」として本所南割下水（現墨田区両国）江川家江戸屋敷に居を移すと共に、江川に同行し伊豆葦山とも往来し、そこにも活動拠点をもつことになる。進歩派知識人として開国後の世界情勢とりわけアメリカの動向に深い関心をもつ江川は、同年10月、万次郎からの聴取をもとに「松平土佐守小人中浜万次郎北亜米利加在留中様子相尋候趣申上候書付」を作成している⁽²³⁾。ここでは多方面にわたる質問を万次郎に発し、万次郎も我が意を得たりとばかり明快な回答を返している。こうした接触を通じて得た万次郎の学識と人間性への信頼感が、万次郎登用の決め手になったことは確かであろう。いわば万次郎は、江川にとって「翻訳官兼外交顧問」というべき存在となった⁽²⁴⁾。

江川が万次郎に発した質問はきわめて具体的で、まさに「米学事始」の感があるが、そのいくつかを以下に記しておきたい。「米国の位置及国状の概要」「米国独立共和政治」「米土人種」「米国政体州政自治」「米回国書〔ペリーが提出した〕中にある大統領及使節のこと」「日本に親交を求むる所以」「通商を請ふ趣意は知らず」「石炭のこと」「九州の一港借受け度きこと」「琉球受入の説なし」「造船術」「砲術熟練」「港の防備」等々、軍事・政治・社会・経済等きわめて多岐にわたり万次郎の回答を求めている。ここでは捕鯨との関連で万次郎が述べた言葉を二点、原文のまま紹介しておきたい。

第一は在米中の捕鯨体験に関するもので、こう述べられた。「在留中彼国鯨漁船に乗組、御国近海大東洋は勿論南北太平洋、大西洋、大南海等度々通行いたし、天度の測量は勿論、帆遣い方等悉覚居候間、大船さへ有之候へば、何れ之国へも航海相成候由」。

第二は英語に対する万次郎の自負である。「彼国在留或は鯨漁乗組漁事に出、都合拾一ヶ年の間彼国人と相交り、且書籍文字をも学ひ候間、彼国の者に応接亦は通弁等之儀、如何様入組候事にさえ相

辨候由。」

これらの言葉の端々から 26 歳の元漂流漁師中浜万次郎の捕鯨、測量術、航海術、そして英語に対する並々ならぬ自信と自負が汲み取れる。もちろん江川による一種の「面接試問」であり答える万次郎に気負いがあったかとも考えられるが、それにしても 10 年間の体験にもとづく確固たる自信がなければこうした言葉は口をついて出ないであろう。

逆にこうしたアメリカとの深いつながりが、強硬な姿勢で開国を迫るアメリカへの反感と相まって、幕府上層の一部に万次郎に対する警戒心を呼び起こしたことも事実であった。そのことは、とりわけペリー再訪に備えての通訳人事をめぐって露呈した。米艦隊進入の阻止交渉を受命した江川は、当然のことながら万次郎を英語通訳（前年はオランダ語通詞による複線型折衝）として登用したいと考えた。しかしながら、これには水戸の徳川斉昭ら保守派要人筋から強い異論が噴出し、結局ペリーとの第 2 回目の折衝において、万次郎登用は見送られることになった。この間の経緯を概観すると、ペリー来航中の安政元(1854)年正月 23 日、万次郎登用を進言した海防掛江川に対し、老中阿部正弘は万次郎については江川が引き受けているので「反問」（スパイ）の心配はないものの、「異人」が船中で彼を連れ去るかも知れず、また「水戸烈公や他の老中」の間にも起用反対の声が強いので通訳として同行させるのは見合わせた方がよからう、との書簡を届けている。これに対し複雑な胸中を抑えつつ、江川は「御書取の趣承知」した旨、阿部に返書をしたためたのであった⁽²⁵⁾。開明派の江川に対し高い評価をしていた阿部でさえ、根強い攘夷派勢力にはさまざまな面で譲歩せざるを得なかった事実を象徴的に示した一件であった。

対米交渉における通訳との関連で付言するならば、それから 6 年を経た万延元(1860)年の軍艦奉行木村摂津守を全権とする咸臨丸での訪米使節団においても、万次郎の登用については、彼の「アメリカ教育」故に異論が出た。とくに前年、横浜碇泊中の外国船に招かれた科で軍艦所教授方を罷免されたことも、万次郎登用への反対論の一因だった。しかし「(万次郎は) 英語通弁は勿論、兼ねて船働きも仕り候者に付き」という木村の強い推挙で公式通訳としての登用が決定した。そして帰国後の万次郎は、幕府から次のような感状を銀 30 枚と共に下賜されている⁽²⁶⁾。「亜墨利加国え御軍艦被差遣候儀は御用初以来初而之事ニ候処、数千里之航海無滞御用相勤格別骨折候ニ付別段為御褒美被下之」。

その後万次郎は江川の手附として江川塾で英学を講じる一方、江川歿（1855 年）後は川路聖謨ら開明派の幕府要人に対し捕鯨の重要性を進言し続けた。捕鯨は経済的に国益に寄与するだけでなく、航海術の進展、船員訓練に資するというのが万次郎の一貫した信念であった。そして安政 4(1857)年、川路の同意を得、箱館奉行の下で捕鯨法の伝習にあたることを命じられた。これは不首尾に終わったものの、日本がアメリカ式捕鯨に着手した最初の事例であった。こうした経緯をふまえ安政 6 年、万次郎は幕府の鯨漁御用に任じられた⁽²⁷⁾。鯨漁御用万次郎が最初に乗り組んだのは、捕鯨装備を整えた 70 トン弱の帆船であった。この船はロシアのスクーネル船をモデルにしたもので、建造された西伊豆君沢郡（現静岡県沼津市戸田）の名をとり「君沢型壺番御船」と命名された⁽²⁸⁾。同年 3 月、壺番御船は品川から小笠原近海へ出漁するも、乗組員の技術未熟に加え暴風のため断念し下田に帰着した。このことから万次郎は、本格的な捕鯨船の必要性を痛感することになる。そうした折に平野廉蔵との協力が具体化することになる⁽²⁹⁾。

江川塾で万次郎門下生となった青年には、大鳥圭介、細川潤次郎、箕作麟祥、伊澤修二ら維新後の各界で指導的地位についた者も少なくなかった。幕臣でも士族でもなかったが、北越出身の平野廉蔵もその一人であった。次章で述べるように平野と万次郎は近代捕鯨の導入を企画し、実践に移した先駆であり、結果的には顕著な成果を収めたわけではなかったが、日本の捕鯨史の中で重要な位置を占めることになる。この二人が幕府の支援をとりつけ積極的に捕鯨に乗り出すのは江川坦庵歿後のことであったが、興味深いことに江川は、それより以前に捕鯨について幕府の諮問に答え私見を述べていた。それは江川が江戸湾測量を命じられたのと同じ天保10(1839)年のことであった。同年5月に幕府に上申した江川の「書付」には、「鯨多候由」といわれる「伊豆、相模、上総国」における捕鯨の実態が報告されている。たとえば「関東之内、房州平群郡勝山、岩井袋両村而已ニ而先年より鯨漁仕来、尤鯨之種類数品有之、右両村においては多くは追棒と唱候を漁し、小振には候得共、格別利益ニ相成候由、年柄氣候により多少有之拾ヶ年平均壹ヶ年ニ拾尾位宛漁シ得候趣ニ御座候……」と述べられている。また大島の鯨漁については、「漁船壹艘ニ付、乗組七人より拾貳人迄、拾艘より貳拾艘迄を壹組ニいたし、もり数本突込漁業仕候由」とその漁法が描かれている⁽³⁰⁾。もちろん当時の捕鯨は日本の各地特有の主に近海を漁場とする伝統的な方法であり、後年、日本が導入しようとした大型母船に4艘のポートを積み、鯨を求めて3年余の航海に出る洋式捕鯨とは質量とも大きく異なるものであった。

ところで同じ天保年間、平野廉蔵の郷土に近い新発田藩の「御触書」の第1項は「油の論」と題され鯨油に言及している。そこでは害虫駆除のため水田に油を注ぎ入れる農法を伝えているが、その油について以下のように鯨油の効能が特筆されている⁽³¹⁾。「鯨油を最上とし五島、平戸、熊野其外伊予より出るもの正真なり。値段は四斗樽入銀百目前後、一升二文目五分位。雑魚油は鰯、鱈、鮪の油最も多し。一反に鯨油五合入るべき処へハ一升余も入れざれば其功に対しかたし。但、雑魚油と見分る事専要なり。雑魚油は濁りてくさし、鯨油は清くしてくさからず。」

稲の害虫駆除のための注油は、17世紀後半から九州北部でみられたが、広く各地に広がったのは新発田藩「御触書」に先立つ文政9(1826)年、大蔵永常の『除蝗録』を契機にしてのことだといわれる。『農家益』『広益国産考』等多くの著作を著し「放浪の農学者」と評された大蔵は、同書で「みづ鯨を去に用ふべき油ハ鯨油を最上とす」と記し、以来「鯨油の除蝗薬としての利用の広がりは、西海地方の捕鯨業の繁栄と重なって」いった⁽³²⁾。

3. 文人起業家・平野廉蔵と捕鯨

平野廉蔵は北越の日本海沿岸に約16キロにわたって点在する五つの浜の一つ、村松浜に豪商の次男として文政10(1827)年に生まれた。この地方は江戸時代の東廻回船、西廻回船を中心とする海上交易の発達の中で蝦夷地(北海道)方面へ進出する廻船の基地として栄え、各浜に富豪が輩出した。平野家もその一つで、当主は代々安之丞を名乗った。

廉蔵にとって祖父にあたる平野藹臣(5代安之丞、号鷗邊)は、漢詩に長じた文人氣質の知識人として名をはせ北越の名士としてこう紹介されている⁽³³⁾。「豪邁敢為。夙に海外の事情に通じ肇めて洋製に倣うて三桅檣船を造り北海に貿易す。……其の事跡、詳ならずと雖も勘察加〔カムチャツカ〕に往来露人と貿易して巨利を博し、其家多く異宝を蔵せりといふ。」また藹臣には七言絶句五十首をお

さめた『鷗邊詩鈔』と題した漢詩集が遺されているが、そこに序を寄せているのが頼山陽の息子頼三樹三郎である⁽³⁴⁾。

平野家長子の家系は1897(明治30)年に絶えているが(廉蔵は生涯独身であったが、兄世寛の二男為信を養子とした)、かつて平野家があった海岸近く落ち着いたたたずまいの町の一角には、同家の事蹟に触れた石碑が建っている。またその生家近くには金刀比羅神社が建立されており、それを取り巻く堀の美しさでも知られる。毎年8月19、20日には金刀比羅祭りが開かれ、集落の人たちの安寧祈願の場となっている(村松浜の小林博実氏からの聞き取り、2017年4月5日。筆者も2017年8月19日、同地を再訪した。)。この金刀比羅宮は、第4代安之丞が天明8(1788)年、海上安全の信仰対象として四国本社(讃岐)から分霊し勧請したものであり、往時の平野家の栄華を物語る貴重な歴史遺産となっている⁽³⁵⁾。

平野家の素封家ぶりを示す史料として、幕府の海防強化策と関連した「越後国蒲原郡上金者名前書上帳」と題した文書がある。ここには「異国船渡来ニ付御上金書上名前帳」として寄進者の氏名が記されている。いわば「国防献金」の江戸時代版といえるが、廉蔵の父平野世秀(第6代安之丞)は市嶋徳二郎と共に金千両という大金を寄進し、首位の座を占めている⁽³⁶⁾。

廉蔵は32歳の若さで夭折した世秀(号橘堂)を6歳で継いだ7代目当主世寛の実弟であるが、幼少時から脚疾のため歩行困難で、長じてその治療をかね兄世寛の勧めで長崎に遊学する。20歳代後半のころと思われるが、長崎で頼った医師が後述のイギリス人医師で石油に関する知識も持ち合わせていたといわれるシングルトンであった。世寛は蝦夷地(北海道)でのロシア人との貿易で巨富を得⁽³⁷⁾、当主として聡明な弟廉蔵に期待をかけたのであった。知的好奇心旺盛な廉蔵は、長崎で蘭学に親しむ中で西欧近代文明の一端に触れて帰郷する。まもなく北越の地にもジョン万次郎の盛名が届くようになると、廉蔵は新たに英学への関心を押さええがたく、安政4(1857)年頃従僕一人を伴い江戸に出立し、江川塾の門を叩く。日々師ジョン万次郎と接する中、英語やアメリカ(欧米)世界への関心をふくらませると同時に、万次郎が説く捕鯨の重要性にも急速に目を開かれるようになった。また越後で人々の間で「燃え水」と呼ばれた水が石油という物質であることも万次郎から学び、後年探油にも事業の手を広げるようになる。

前述した壱番御船による小笠原諸島近海への航行が頓挫した直後、安政6(1859)年に書かれた万次郎の肉筆日記が、7月から10月までであるが中浜家に残されている⁽³⁸⁾。その万次郎日記には、英語を学びに江川塾を訪ねる多くの知識人との往来に加え、平野との交遊や捕鯨準備に関する記述もしばしばみられ、貴重な史料となっている。そのいくつかを記しておきたい。7月28日「日記」には「廉蔵之願書〔捕鯨〕を御代官里見源左衛門より御陣〈甚〉所へ御差出相成候由承之」とあり、平野が万次郎を通じて(もしくは万次郎の意をうけ)鯨漁願いを幕府に提出したことがうかがわれる。ついで8月13日には暴風雨も止み、夜「八つ時頃より晴天にして風和らき、夕方より平野廉蔵旅宿へ罷出候事。」

8月14日 「……七つ時より川路左衛門尉〔聖謨〕御屋敷へ。夜入帰宅。山田熊蔵来り平野廉蔵并小寺太純英学之ため罷出候事。」

8月15日 「……為舟遊為誘平野廉蔵宅へ罷出候事。」

8月16日 「晴天にして風和き。君沢形壱番御船へ罷越、右御船間敷を取操練所へ書出置候。」

9月2日 「昼後より細川潤次郎同道ニ而土州〔土佐藩〕上屋敷へ罷出、乍序時貳つ平野廉蔵へ返済致候。」

9月3日 「平野廉蔵儀拾三兩之時皆買得候事。」

10月3日 「英語稽古有之、根津金次郎、箕作貞次郎〔麟祥〕、大鳥圭介入来之事。……平野廉蔵宅へ罷越直帰宅。」

10月4日 「夜入平野廉蔵旅へ参り、其より大鳥圭介宅罷出候事。」

10月18日 「平野廉蔵宅江参り候事。」

身分的には門下生である平野の逗留先をしばしば訪ね、捕鯨計画等につき親しく意見を交わしていただろうことがうかがわれる（その他、「日記」には前述した英語を学びに来た大鳥圭介、箕作麟祥らの名が数多く登場するが、その中で圧倒的に多いのが土州御屋敷に住む同郷の細川潤次郎である）。

万次郎の強力な支援により捕鯨操業許可を求めた平野であったが、幕府から3年の試験操業の許可がおりたのは文久元(1861)年に入ってからのものであった。それは最初の3年間は無税とし、4年目から運上金支払いの義務を課すものであった。平野は兄世寛の資金協力を得6万8千両の巨費⁽³⁹⁾を投じてオランダ船を購入し捕鯨用に改造、これを壱番丸と名づけた。その際万次郎は前回の試験捕鯨のとき新調査せ海軍方に預けてあった手投鉞、大切包丁、さらには前述した水野筑後守忠徳を団長とする視察団の一員として小笠原を訪ねたとき、欧米系住民から買い求めた捕鯨銃、炸裂鉞5本も借り出すなど準備に余念がなかった⁽⁴⁰⁾。

水野調査団が乗り組んだのは、アメリカから帰国したばかりの咸臨丸であったが、現地での欧米系住民との折衝のために万次郎も通訳として乗り組んだ。帰任後の意見書の中で水野は、領有確定後の小笠原諸島開拓の一環として捕鯨の必要性を強調した。同行した本草学者小野苓庵も、団長水野と同様「小笠原島近海鯨漁之儀ニ付申上候」として書付を提出した。その中で小野は「鯨漁ノ儀」こそ日本の物産政策に資するものでありながら、同島海域においてはアメリカ捕鯨が活発であるのに対し、日本は捕鯨器械をもたないため操業に着手できず「大利」をむぎむぎ外国人に与えているのは「遺憾至極」であり、なんとかして日本の鯨漁を盛んにすべきと具申した。そしてそれには越後の平野廉蔵のような「鯨漁稼方有志の者」を募り、アメリカ人からの技術移転をはかったらどうかと提言する⁽⁴¹⁾。これには「鯨漁稼方有志ノ者募集」の「御触案」が添えられた。

捕鯨事業をめぐるこのような流れを背景に、幕府は平野兄弟の捕鯨企画をいわば政府プロジェクトの形で取り込んでいくことになった。それが、咸臨丸が小笠原諸島から江戸に帰った後に平野の出願が承認された要因だと考えられる。ただ廉蔵の良き理解者であり、船購入に巨費を提供した支援者でもあった兄世寛は、壱番丸出航をみることなく文久2年6月病歿している（同年7月には万次郎も、悪性はしかで妻をつを喪っている）。

ここで平野廉蔵と同じ村松浜出身の郷土史家渡辺孝行の発掘した地方文書に依り、前後の状況をみておきたい。それは西頸城郡能生町鬼舞で代々庄屋をつとめ、また数艘の所有廻船で関西から蝦夷地まで広く交易を行っていた伊藤家の文書である。その史料の一つは文久2(1862)年1月付の「御用扣庄屋惣右衛門」と題されたものであり、そこには「越後国蒲原郡村松浜の百姓安之丞〔世寛〕と弟廉蔵」がオランダ商船を買請け文久元年北海路筋で試験的な捕鯨操業を行っていること、操業で獲物があった場合は最寄りの湊、浦々へ入船し、その場で入札、販売すること、また海上の悪天候や鯨油の

売捌等については場合によっては江戸、大坂、長崎、箱館はじめ他の港にも入津するので私領、天領とも管轄下の沿岸村落へこのことを申し渡す、との幕府からの示達が記されている⁽⁴²⁾。ここからも幕府が平野兄弟の起業に触発されるかのように捕鯨へ本格的な関心を向け始めたことが判明する。

さらに同年4月、幕府は全国に次のような触流を出している⁽⁴³⁾。「越後国蒲原郡村松浜百姓廉蔵同様、鯨漁稼方有志ノ者ハ可願出申旨御触流シ御座候ハ、身代相応ニテ大利ヲ射ル者共ハ競テ願出可申」。

積極的な捕鯨奨励策の下で、幕府は文久2年10月28日付の中浜万次郎の上申書を受理した。それをふまえ幕府は、平野家の持船を買い上げ万次郎を船長とする壱番丸の出漁を命じ、翌文久3年1月の小笠原諸島に向けての出帆となったのである。

平野世寛の死後まもない文久2(1862)年12月26日、万次郎を船長とする平野廉蔵の持船壱番丸は品川を出港、翌文久3年1月9日父島二見港に入港する。乗組員には平野と同郷の越後人で「海陸商用其他取締方」本間卯之助、「伝習人、運用」平野五右衛門（親戚）、同平野七五七（養子為信）、「按針」遠山定助、岩本要之助らが乗り組んだ。父島到着後、一行は積んできた木材で鯨漁用の短艇二艘を建造、3月に竣工した。こうした準備を整え、壱番丸は小笠原諸島近海に出漁し、捕獲したマッコウクジラ2頭から鯨油96バーレルを得た。しかしながら薪水欠乏のため4月20日帰島、10日後の5月1日浦賀へ向け出港した。なお壱番丸には、幕府派遣団員として在島中の幕吏松浪権之丞、林和一郎の二人が「鯨漁の方法に帆船の操作の伝習を希望」し同乗していた⁽⁴⁴⁾。

文久3年正月9日父島に入港した万次郎、平野らの様子は、幕府が送った小笠原派遣団で医師を務め当時在島中だった本草学者阿部櫨斎の「豆嶼行記」にもしばしば登場する。阿部が乗船した朝陽丸は文久2年6月18日に品川を出発し浦賀に向かうが、そこでの麻疹大流行のため1ヵ月ほど足止めをくらい、その後八丈島を経由8月26日ようやく父島に入港する。阿部日記をみると、最初に平野の名が登場するのは浦賀滞在中の6月29日のことであり、「越後国平野廉蔵鯨獵船上乗ニテ」と一言触れている⁽⁴⁵⁾。そして翌文久3年1月、万次郎、平野が捕鯨のため壱番丸で父島に入港して以来、阿部は彼らと親しく往来し、結局は同年5月、壱番丸に同乗し幕府の朝陽丸一行より一足早く帰還する形となった。ここでは「豆嶼行記」にみられる阿部と万次郎、平野らとの往来の一端をみておきたい。まず新年1月9日の壱番丸（「豆嶼行記」には「平野船」と記）入港日の様子を紹介する⁽⁴⁶⁾。

「晴、怒濤響強シ、暖 四ツ時ニ一点ノ白星ヲ見ル、追々望遠鏡ニテ日ノ丸ノ御旗ヲ見トメ、フラズ〔旗〕ヲ建テ火ヲ焼キギツキ用意……同正午ニ大村ノ前ニ碇舶ス、平野船ノヨシニ見ヘ申候、海上ヤ、平安ナリ、ブルビーチヨリトック〔青鷺〕二羽到来、中浜万次郎、卯之助外水夫一人上陸、平野艦ヘ行夕刻ニカヘル、一羽平野、中浜ヘフリーセント」。浦賀以来の再会で話の通じる二人の来島で阿部が喜んでいる様がかがえる。

1月14日「海上平安音ナシ、午後ヒトヘ物着用、平野船ヨリ農具、食料、釜、鍋、小屋二軒等ヲ陸ニ運送了」。壱番丸船主平野は、漁獵許可を幕府から得るに際し、先着の幕府派遣団に送り届ける食料や生活必需品を無料で運搬することを条件としていたことを具体的に示している。

1月21日「平野船一同ニ風邪ノ手当、万次郎ニ投剤、家切組板、畳揚ル、蠮一ツ」。蠮（ウミガメ）は住民とくに欧米系の人々にとって、動物性蛋白源として重宝されていた。阿部も塩煮した亀肉を買い求め「本邦鯉魚羹と一様のノ趣ナリ」と賞している。医師としての活動についてもしばしば言及があるが、阿部には壱番丸が積んできた食料も大きな楽しみであったようで、「四ツ時ヨリ平野船ヘ行、

カローメル〔塩化水銀〕、金硫黄〔アンチモン〕、ヒヨス〔ロート根〕、オックス、ホウト〔?〕五品ヲ請取来ル(1月15日)、「平野廉蔵上陸ス、鶏卵十一アリ、七ツヲ採ル(1月22日)、「平野船ヨリ魚到来(1月27日)、「春分……浪音高ク平野廉造〔蔵〕今日ヨリ上陸、村中のさはぎや不時の祝ひもち(2月3日)、「平野船ニテチエルリヲ飲了、桜実ヲ以テ醸製スルヨシ(2月15日)、「ウエルロウヒス黄金鯛、鯛等ヲ平野船ヨリ来ル、鯛ニ似テ黄色、眼ハヤ、淡ナリ(3月2日)、等々医薬品とならび味覚に関する記述が頻出する。

また「万二〔次〕郎同伴、洲先〔崎〕村ニテ造船ノ小屋ニ至リパッテイラノ製造式ヲ見ル、同晩パッテイラニテ万次郎、同船ニテカヘル、蚊ノ多キニ苦シム。」(1月28日)、「一同休日、平野〔船〕へ行、砲術ヲ学ブ、夜雨(2月28日)等からは、万次郎の師江川太郎左衛門ゆずりの造船、砲術等への関心の深さがうかがえる。

文久3年3月になると「豆嶋行記」にも壱番丸の出漁関係の記述が登場する。3月13日「晴、朝霧濛々、早天ヨリヒトヘ物、薬品ノ儀ニ付平野艦一行暑気払ヲ送り、又曇ル又晴、衆人予ノ所ニ会シテ酒食ス、別レヲ送ル也」、3月17日「平野船出帆四ツ半過ヨリ淡々日色ヲ見ル。双方祝砲ヲ発ス、役々ト供ニ鯨漁船〔壱番丸〕へ行、夕刻カヘル」

4月20日、万次郎一行は1ヵ月余の操業を終え父島に戻る。同日の「豆嶋行記」の一節、「日中暖、家ニアレバ涼、外ニ出レバ暑。芒種、平野丸夕刻入津、三発〔豊漁の祝砲〕、鯨二本トリ」。また27日「日記」は鯨漁について万次郎らの談をもとに「八丈沖十八里余、一本竹三十尋程ト鳥島ノ間ニテ二本トリ申候ヨシ」と書かれている。

ジョン万次郎、平野廉蔵の宿願であった小笠原諸島近海での操業は大成果とはいえないまでもまずまずの成果をおさめ、4月20日に父島帰港、そして5月1日江戸に向け出港となる。この鯨漁の間、壱番丸はかつて少年万次郎が漂着した鳥島に立ち寄り「大日本属島」の標識を建てている。他方、船内では外交問題に絡むある事件が発生した。

その事件とは、出漁にあたり父島で傭い入れた在住外国人乗組員のうち、アメリカ人ウィリアム・スミスとジョージ・ホートンを船内での窃盗等「姦悪彌紛も無」と断定し、扇浦の仮獄舎に拘留したことに端を発する。船長万次郎らの判断で、父島離島に際し二人を横浜の米合衆国領事館に連行することになる。「実質的被害は皆無という誠に些細な事件」⁽⁴⁷⁾であったが、その後外交レベルでの交渉は紛糾し、最終的には翌元治元(1864)年12月、外国奉行竹本隼人正明らと米領事館当局との折衝で、幕府は連行の非を詫げる形で1千ドルの「賠償金」を支払うことで結着がつけられた。日本側には、この「些細な事件」で小笠原諸島の領有権問題が再燃することは国益を傷つけるとの判断もあったと考えられる。「事件」の発端となったスミスは米領事フィッシャーによりアメリカへ強制送還されるが、米側は80歳を越したホートンについては同情的で冤罪を主張し、帰島させるべしと要求した。日本側の強硬な反対で父島帰島は許されなかったものの、ホートンは1千ドルの「賠償金」をもとに米領事館の保護下に置かれ2年後に横浜で死去している。

このいわゆる外交問題としての「ホートン事件」については、外務省編『統通信全覧 類輯之部』第27巻、第35巻に詳細が記されているほか、研究史的にも興味深い異なる解釈がなされている。たとえば田中弘之は、最終決着までの約1年の「米側側が行った証拠を無視した一方的判決、恣意的な賠償金の請求、武力行使を示唆する圧迫等」を列挙し、事件の本質を「不平等条約下における不公正

な領事裁判をめぐる典型的な事例」として捉えている⁽⁴⁸⁾。

他方、1千ドル支払いの決定を含む一連の事態の進捗の中で万次郎が果たした役割に着目する石原俊は、幕吏（「主権のエージェントである自分」）としての万次郎が「まず意識していたのは……ホートンを父島に送還することによって移住者たちの間に日本の法を失効させる力が増殖」することへの強い懸念であったと指摘する。自ら「移動民の生」の体験者である万次郎は、「同じ移動民」ホートンの言動から、彼の帰島が日本統治の下での秩序を脅かす危険性を感知していたであろうことを石原は示唆するのであった⁽⁴⁹⁾。

4. 維新前後期の両者の足跡

4.1 ジョン万次郎

嘉永7(1854)年のペリー再訪時、ジョン万次郎は英語通訳としては第一人者であったものの、前述のとおり幕府中枢の一部の強い反対もあり、その任につくことがかなわなかった。しかしながらその後は江川坦庵、川路聖謨ら彼を熱心に庇護した幕府高官の支援もあり、軍艦所教授あるいは鯨漁御用としてその体験と学識とを活用する機会を与えられた。とはいっても、幕臣としてはあくまでも傍流に過ぎず、また幕閣内で開明派の影響力が減じる中、万次郎のその後の歩みはその能力に比し必ずしも栄光につつまれたものとはいえなかった。

時系列的に手短かにその後の万次郎のキャリアをみておきたい⁽⁵⁰⁾。小笠原諸島近海での捕鯨から戻った翌年、元治元(1864)年、万次郎は薩摩藩に請われ軍艦運用や英語教授をつとめる。明治維新直後の明治元年、万次郎は禄百石でふたたび高知藩に召され海軍の育成指導にあたる。ついで明治2(1869)年、新政府の徴士として開成学校二等教授を命じられるも健康上の理由ではやばやと辞任することになる。翌3年9月、大山巖、林有造らと独仏戦争の実情視察の命を受け渡欧するも病を得てロンドンで静養、そして翌年アメリカ経由単身帰国する。その後万次郎はこれといった要職につくこともなかったが、中浜家所蔵の資料には、老境に達しつつあった万次郎が明治21(1888)年、最後の小笠原諸島方面への航海を試みていることが記録されている⁽⁵¹⁾。船名、目的等は不詳だが、同年6月17日朝7時、北緯29度52分、東経140度11分等と書かれており、天体観測をしながら英語で記録を残していた。60歳を越えた時点でのこの航海で、万次郎は数奇な運命をたどった人生の原点を確認しつつ、また相許した平野廉蔵に思いをはせながら、「終活」の準備をしていたのだろうか。そして明治31(1898)年11月、万次郎は波乱に満ちた72歳の生涯を閉じたのだ⁽⁵²⁾。

幕末の一時期、万次郎と強い絆で結ばれた平野廉蔵は、その16年前、明治15(1882)年、54歳で師より早く生を終えていた。二人の関係を父から幼少時より聞かされて育った万次郎の長男中浜東一郎は、学生時代の明治7年夏、父に伴われ三国峠越えて越後入りし、新潟市内にひっそりと暮らしていた廉蔵と初対面の挨拶を交わした。その後、平野歿までの7年間、東一郎は三度親しく廉蔵を訪ねている。さらに半世紀余を経た昭和6(1931)年、老境に達していた東一郎は平野家ゆかりの地村松浜を訪ねるも、すでに家屋はとり壊され、先代世寛（兄）の記念碑に平野家の栄光の跡をしのぶのみであった。そして戊辰戦争で家財を失った上、明治になって着手したほとんどの事業に失敗し、数代にわたり築いた富を無にしたにもかかわらず、知的好奇心とあくなき事業家精神を持ち続けた平野廉蔵が忘却の人になっているのは、「本邦文化史上遺憾の事といはざるべからず」と、東一郎は父の盟友

を悼むのであった⁽⁵³⁾。

4.2 平野廉蔵

兄世寛歿（1862年）後、事実上平野家の最後の当主となった廉蔵であるが、今日幕末維新期の平野家の実相を知り得る捕鯨関係、商品取引等の一次史料は地元村松浜にもほとんど残っていない。その最大の原因は、この地一帯が戊辰戦争（同地では北越戦争の名称）の苛烈な戦場と化し、平野家関連の大量の地方文書も灰燼に帰したことにある。

明治維新直後、新政府による徳川政権最後の将軍徳川慶喜追討令が出された後、政府軍が最大の朝敵とみなしたのは桑名藩と会津藩であった。この会津藩に対する政府軍のきびしい処遇に反発した東北・北越地方の諸藩（仙台、会津、米沢、酒田、村上、村松、黒川、三根山など）は奥羽越列藩同盟を結成、激しい抗戦を試みるも、明治元年9月に会津藩が降伏、奥羽列藩同盟も相次いで政府軍の軍門に降る。村松浜をふくむ中条一帯（黒川藩）は激戦の地となり、『中条町史』を借りるなら「官軍・同盟軍ともに町や村から多くの人馬を徴発し、荷役などにあたらせた。朝に東軍〔同盟軍〕の支配をうけ、夕に西軍〔政府軍〕に属し、夫役や食糧調達、そして献金などの負担に加えて戦災をうけた民衆は悲惨な状況に置かれた」⁽⁵⁴⁾。一般に北越戦争史では、その戦争の過程で中条地方の隣藩新発田藩が列藩同盟から脱落し新政権に恭順の意を表明し政府軍の先導役をつとめたことが、列藩同盟の劣勢を決定的なものにしたとされている⁽⁵⁵⁾。

この戊辰北越戦争がもたらした影響を平野家の視点で知ることのできる貴重な証言が、『村松浜郷土史』の中に収められている。それは17歳まで平野家で養育された小林リワ（1852年生まれ）という女性の談話記録である⁽⁵⁶⁾。北越戦争最終段階当時の村松浜を振り返り、リワは新発田藩の「寝返り」で会津軍（列藩同盟軍）が苦戦を強いられる中、平野家では「丹那樣〔平野廉蔵〕が一同集め」破滅に向かいつつある事態を詳細に伝えた後で、「平野家は、永年の恩顧に報いるため」最後まで会津藩に協力すると決意を告げ、邸内16の蔵から千両箱、食糧を三日三晩かけて馬車で村上まで運び出し、女子供も戦闘に備え、朝に晩に剣術稽古に励んだという。そして政府軍が村松浜に押し寄せるや、討伐隊は平野家のめばしい家財財産を手当たり次第持ち去り、家屋敷に火を放って引き上げたという。「丹那樣〔廉蔵〕は後難をさげ岩船から無事に逃げた」と語るリワは、前大戦末期の1944年6月、93歳で死去するまで、断絶した平野本家への恩義と明治政府軍への許しがたい反感の念を保持し、語り続けたのであった。

戦禍で主な家財を失った廉蔵は、それでも新潟市内に移り住み平野家再興を期して立ち上がる。平野の才をもってすれば妥協して官途につく道もあったと思われるが、かつて受けた幕府からの恩義、あるいは「官軍」への反発もあったのか、それは彼の選択肢にはなかった。こうして捕鯨に取り組んだ起業家精神を保持しつつ廉蔵は、万次郎から吸収した西欧の産業技術にふたたび目を向ける。彼が最初に着手したのが採油であった。鯨油時代に代わり19世紀後半の世界が急速に石油時代に入ろうとしている中⁽⁵⁷⁾、廉蔵は明治初期、かつて長崎遊学中に知遇を得たイギリス人医師シングルトン（Singleton）を伴い、生地に近い黒川村の油井調査と機械鑿井を試みるも成功しなかった⁽⁵⁸⁾。北越一帯では江戸時代中期から草生水（臭水）の名で石油が話題となっていたが、石油ランプが輸入され、灯台や家庭用灯火として普及するようになると、灯油への需要が急増した。石油時代の夜明けと共に明治6(1873)年には「日本坑法」が制定され、採掘許可を受ければ日本人でありさえすれば誰でも石

油稼業が可能となった。こうして明治6,7年になると石油坑出願が相次いだ（明治7年のみで44人）。その出願は圧倒的に新潟県人が多く、しかもその多くは在地の中小地主であり、平野廉蔵もその一人であった。また県内の旧藩士族にも授産事業として石油開発に参画させたため、旧士族からの出願もかなりの数に達した⁽⁵⁹⁾。

成功には至らなかったものの、廉蔵が石油にかけた情熱は、断片的ながら今日いくつかの文献の中で言及されている。たとえば『黒川村誌』には、明治6年、廉蔵の招きで前述したイギリス人医師シングルトンが館村に出向き地層の傾斜を観測した後、手掘り井戸による採油を指導したところ、それが成功したため手掘り井戸による「石油ブーム」が一時塩谷地区を中心に巻き起こったと記されている⁽⁶⁰⁾。また『長岡市史』には平野の名への直接的な言及はないものの、「明治四年村松〔浜〕の人（氏名不詳）が宮路・成願寺附近で石油の露面を発見して手掘りを試みたが、出油はしなかった」と記されている⁽⁶¹⁾。前後の状況に鑑み、同人を平野廉蔵とみて過誤はないであろう。

このように新潟県下における石油発掘史が取り上げられる時、平野廉蔵の名（推定もふくめ）は忘却されることはない。その意味でも、二つの石油に関する専門文献の中で平野の名が記録にとどめられていることは注目に値しよう。

その一つは、平野歿から20年後に刊行された門馬豊次著『北越石油業発達史』という資料である⁽⁶²⁾。同書に序を寄せた鉱山局長田中隆三は、石油時代の到来を前に今後「斯業振興ノ必要ハ愈々切実ヲ加」える中で本書の価値大なることを説く。著者門馬は長岡市に拠点をおく鉱報社主筆であるが、まず冒頭の「帝国石油業年表」の中で「平野某」につき、最初期の採油事業家としてこう言及する。「嘉永以後頸城刈羽地方に臭水採取行はる維新前後村松〔浜〕人平野某機械鑿井を企て未だ営業せずして失敗す。」さらに本文中に「機械鑿の嚆矢」という一節を設け、平野の存在を高く評価している。門馬は日本における「石油採掘用機械鑿井の創始」として石坂周造の名が良く知られているがと前置きしつつ、次のような表現で平野を石油開拓のパイオニアの一人と位置づけている。「更に石坂氏より早きものあり即ち旧村松藩〔浜〕の豪族平野安之丞なる人維新の当時既に自ら汽船を購ひ之れを日本海に泛べ又石油業に志し米〔英〕国人シンクロトン〔シングルトン〕なるものを聘用し下越黒川地方の油田を探查せしめ岸田吟香氏に謀り鑿井機械を米国より購入し之れを某所有汽船に乗せ横浜より回航する途上に難破せし為め遂に失敗に終りしと云ふ此計画の失敗後両三年にして石坂周造氏の石油会社組織の挙あり。」

もう一点の文献も、平野について「わが国石油産業の先駆者の一人」と位置づけ「北蒲原郡中村松浜の豪族平野安之丞」の名を記録にとどめている⁽⁶³⁾。興味深いことに、ここでも平野廉蔵と、4歳年下で後に「支那通兼精錡水〔目薬〕本舗、また東京日日新聞の元祖」（大隈重信評）として知られる岸田吟香との石油を通じての接触に言及されている。

維新後の廉蔵は石油以外にも西欧の産業技術の応用へ関心を広げ、洋式水道の敷設や捕獲魚類の保存に不可欠な製氷にも積極的に取り組んだ。その舞台となったのは、廻船業を通じ先々代の安之丞以来平野家とゆかりの深かった函館であった。これらの事業の実態を知り得る一次史料は未見であるが、製氷については『函館市史』に以下のような簡潔な記述がみられる。「慶応年間に居留英国人のブラキストンや新潟出身の平野某らによって亀田川願乗寺川の川筋を利用して試みられたこともあったとされる⁽⁶⁴⁾。」

しかしながら、手元に残った資産を投じながら試みた平野のいずれの事業も、採算がとれるまでに

至らず事実上失敗に終わった。こうして戊辰戦争で大きな痛手を蒙った平野家の家産は、ますます傾くことになった。

青年時代の長崎遊学に始まり江戸での研鑽、そして小笠原諸島への出漁等、あくなき知的エネルギーによって近代文明の導入に取り組んできた廉蔵であるが、維新以降時代運に恵まれないまま、明治15(1882)年2月、生地村松浜で52歳の最期を迎えたのであった。縁戚にあたる平野布袋吉の屋敷内に建てられた二間きりの家屋が終の住処であった。その墓所は生地からほど近い高網にあるが、現在そこには「鷗邊〔祖父藹臣〕平野君墓誌銘」「橘堂〔父世秀〕平野君墓誌銘」の二つの墓碑が残されている。

おわりに

幕末期、小笠原諸島の「回収」を重要な内政・外交課題と位置づけた幕府は、その「回収」と表裏一体的に同諸島の「開拓」にも関心を向けた。「開拓」の実を示すことが、対外的にも日本が主張した同諸島の領有権を裏付けするものとの思惑もあった。そうした幕府の開拓方針の下で、捕鯨が焦点化される。しかも捕鯨はたんなる経済的利益を獲得する手段たるにとどまらず、19世紀中葉以降の幕府を悩ませ続けた海防問題とも密接に関わっていた。捕鯨の重要拠点とされた小笠原諸島及びその近海は、海防の第一線にあるとの地政学的な認識が広く共有されていたのであった。

約言すれば、経済的利益と海防上の関心が、幕府が小笠原諸島での捕鯨事業を推進する際のプッシュ要因となった。他方、そうした「官」の意図と平行する形で民間の側においても、近代捕鯨の導入が日本の産業・技術の増進に寄与すること大であるとの認識から、その導入に乗り出そうとする先駆者が出現した。その最初期のキーパーソンが、日本海での廻漕業で巨富を得ていた富豪平野安之丞一家の最後の当主平野廉蔵であった。そして「官」の政策と「民」の企業家精神を接合する役割を果たしたのが、本質的に「民」の人であり、かつ長きにわたる米国捕鯨船での豊富な体験を背景に幕府＝官の鯨漁御用となっていた土佐人ジョン万次郎であった。この南国人万次郎と北国出身平野の邂逅を媒介したのが、帰還まもない万次郎の登用を積極的に進言した江川坦庵という開明派幕臣であった。江川自身も本論で触れたように、1830年代からつとに捕鯨のもつ大きな効用（経済的利益・航海術・造船技術、そして海防面における）に深い関心をもっていた。このような人間関係を背景として、幕府支援の下でジョン万次郎、平野廉蔵によって実施されたのが、1860年代初頭（文久2～3年）の小笠原諸島近海での壱番丸での鯨漁であった。

幕府はこうした小笠原諸島での「開拓」実績をも根拠の一つとし同島領有を正当化するが、この基本方針は維新後の新政府にも継続され、最終的に1876年の領有宣言へとつながる。同諸島は当初内務省管轄であったが、4年後の明治13(1880)年に東京府に移管され、父島に東京府出張所が設置される。この間、領有まもない1878年10月に内務省は、小笠原諸島開拓・開発の推進機関として勸農局出張所を設置した。ここからもうかがえるように、領有後の同諸島の開発政策は基本的には「農本主義」的な方向で実施されることになる。幕末期に渴望された捕鯨も、石油時代への移行とともにかつての花形国際商品であった鯨油の価値が減退する中、衰退に向かわざるを得なかった。

この間の事情を知る上で、戦後の米軍統治を経1968年小笠原諸島の日本への「返還」後、長年村政に深く関わった八丈島出身の辻友衛の編著『小笠原諸島歴史日記』（全3巻）から、断片的ではある

が捕鯨に関する記事を以下に抜き出しておきたい⁽⁶⁵⁾。明治13(1880)年3月20日「米捕鯨船『レインボー号』寄港、翌日出港。捕鯨船の寄港が激減する⁽⁶⁶⁾」、明治20(1887)年12月「この頃、近海の捕鯨はまったくすたれ、島の漁民はラッコ漁船のハンターなどとして、北洋に出稼ぎに行く者が増える。これにともない、難破や、ロシアに抑留されるなどして帰島しない者が続出する」、明治24(1891)年(n.d.)「父島紀野〔吉郎兵衛〕の捕鯨船が一頭を捕獲するも、台風で諸装備を失い継続を断念する」、明治25(1892)年12月10日「熊本県の日下部正一より捕鯨願が提出されるも、東京府が却下する」、同年(n.d.)「父島の鈴木孝吉、木野左平次が帰化人〔欧米系住民、明治15年全員が日本国籍〕を雇い入れて、近海で捕鯨を行い一頭を捕獲して、鯨脂五九樽を得るも、帰化人がラッコ捕りに出島するため中止となる⁽⁶⁷⁾」。このように領有初期においては、鯨に関する記録は『小笠原諸島歴史日記』に見る限り「景気」が良いとはいえない。

なお、毛皮採取のためのラッコ猟隆盛の指摘に関連し、乱獲でラッコが激減した後のオットセイ(鰐豚)猟についての興味深い資料がある。それは内務省勸農局を経て農商務省御用掛兼宮内省御料局で日本の水産政策に深く関わった鑛木余三男(1853-1908)に関係したものである。鑛木は明治26(1893)年農商務省技師として小笠原諸島の水産業調査のため来島、その後明治39(1906)年に「小笠原島水産奨励」の責任者として父島に赴任するも2年後に病歿する。その4年後、当時の阿利孝太郎島司ら村有力者によって大根山頂に顕彰碑が建立された。その「建碑趣意書」(母島在住石井良則氏所蔵)にはこう書かれている。「[明治26年]或は北海に鰐豚獸獵を試み或は金華山沖に抹香鯨獵に従事……当時外国の獵船我沿岸に出没し巨利を独擅し為に世論沸騰して終に遠洋漁業の奨励を政府に促すに至りしなり。爾來我漁業の發達を致し外国獵船の我領海に跡を絶つに至りしもの君の努力興て大なるものあり。」

領有後サトウキビ(製糖業)を主体とする農業が中心的な産業となる一方、20世紀に入り定住人口も増えるにつれ水産業も次第にさかんになる。とりわけ沖繩(糸満)漁民の移住が始まる(1916年10月、上原組漁民27名)第一次世界大戦期以降、運搬手段や冷蔵技術の發達と相まち、水産業は主要産業の仲間入りを果たすようになる。しかしながら、大正5(1916)年度の漁獲量の内訳をみると、鰹2万6000貫、鯖9000貫、鮪7000貫、鮫5000貫、青海亀484頭等の数字がみられる反面、鯨の捕獲数についての言及はみられない⁽⁶⁸⁾。

このように、かつてジョン万次郎や平野廉蔵が小笠原諸島の捕鯨にはせた“夢”は頓挫したかにもえたが⁽⁶⁹⁾、大正末期1920年代に入ると大きな変化がみられるようになる。これは小笠原諸島内部からの内発的発展というよりも日露戦争後、次第に高まってきた本土水産業界における捕鯨関心の高まりに連動するものであった⁽⁷⁰⁾。その背景には、朝鮮半島近海でノルウェー式捕鯨法を用いたロシア船の進出が活発化したことへの衝撃があった。そして20世紀に入ると各地に割拠する捕鯨会社の合併や買収が進み、明治42(1909)年5月、「独占的捕鯨会社」東洋捕鯨(資本金700万円)が誕生する。当初同社は九州北部西海海域を主要漁場としたが、次第に太平洋方面にも事業を拡大する。こうした中で東洋捕鯨は、関東大震災直後の1923年12月、父島清瀬に捕鯨基地を設け解体処理工場や鯨肥料工場を開設した。ここでは、一漁期(11月～3月)100頭以上の収獲があったとされるが、父島出身の農業技師青野正男は、多くの島民も目撃した同社の鯨解体の現場をこう回顧する⁽⁷¹⁾。「広い板張りの、ゆるい勾配の解体場に、ウインチで巻き上げはじめると、はやくも解体師たちは、巨体に打ち

のぼり、あるいは床上から長刀をふるって切り込む。胸を刺すと、血は滝のように音をなして流れずさまじい……。」

東洋捕鯨に続き 1937 年 12 月には、1920 年代後半から近海捕鯨を拡充していた林兼商店（大洋漁業の前身）も母島・北村に捕鯨基地を設け、戦前期を通じ年平均 200 頭ほどの漁獲があり、小笠原諸島近海はふたたび国内屈指の鯨漁場として知られるようになった⁽⁷²⁾。

このように開戦前、小笠原諸島の人口も約 1 万人を数える中で、鯨は人々の日常生活の中で経済的にも社会的にも深く根を下ろした「生物資源」となっていた。その一端を水産加工商品生産高を小笠原支庁のデータ（昭和 14 年調査）に基づき紹介した辻編著からみておこう。鯨関連の品目としてまず「鯨肉塩蔵」が 14 万 1682 円（約 70 万 5000 キロ）があげられるが、これはかまぼこ等魚類加工 27 万 4586 円に次いでおり、島外移出があると思われるが、住民にとっても重要な動物性蛋白源となっていることがうかがわれる。肥料では群島全体で生産されるほぼ 9 割に相当する 4 万 2771 円（79 万 2000 キロ）が鯨粕肥料となっている。また島内産出の唯一の油源として鯨油は、7 万 7837 円（33 万 4700 キロ）を数えている⁽⁷³⁾。こうした断片的な数字からも、1930 年代を通じ「鯨」が食生活や農耕等、小笠原諸島の人々の暮らしと不可分であったことが判明する。

以上考察したように、幕末 1860 年代初めに開始され 1930 年代まで小笠原諸島の住民経済に重要な位置を占めていた捕鯨であったが、アジア太平洋戦争勃発とともに、とりわけ戦争末期の 1944 年 6 月から始まる大多数の住民の内地への「強制疎開」によって、「小笠原諸島と鯨」をめぐる状況は一変する。

いうまでもなく、一変したのは「捕鯨問題」のみではない。アジア太平洋戦争期、小笠原諸島とりわけ硫黄島は沖縄とともに烈しい地上戦の場となった。さらに「強制疎開」を強いられた 7 千余名の住民のうち、戦後米国の施政権下に置かれた同諸島へ帰還を認められたのは「欧米系」住民 39 名に過ぎず、事実上、戦前の「地域社会」は解体された。1968 年の施政権返還後の小笠原諸島の変容については他稿に譲るが、捕鯨関連の年譜を最後に一瞥しておきたい。1946 年 11 月、小笠原諸島方面での捕鯨出漁が GHQ により許可、翌 46 年 2 月、大洋漁業(株)が元海軍の輸送艦第 19 号艇を小型母船として出漁。その後他の二社（日本水産、極洋捕鯨）も捕鯨を開始するが、1951 年に至り小笠原諸島近海での母船式捕鯨が終了する。施政権返還後の 1981 年、母島東港で日本捕鯨と日東捕鯨により基地式捕鯨が開始される。この点について、1983 年母島小学校に着任した石井良則氏は、「東港で日本捕鯨が解体をしていました。米軍立川基地から見張りの軍人がひとり沖村に住んでいました」と証言する（2017 年 6 月 21 日付、筆者宛書簡）。そして 1985 年の国際的な商業捕鯨の禁止に伴い、1988 年、小笠原諸島での捕鯨の歴史にピリオドが打たれる⁽⁷⁴⁾。ジョン万次郎、平野廉蔵が壱番丸で初めて捕鯨に着手してから 125 年後のことであった。

註

⁽¹⁾ この特別展は上記 2 点の史料群が重要文化財に指定（2016 年 8 月 17 日官報告示）されたことを記念して開催された。企画の全体像については日向玲理「特別展示『幕末へのいざない』の紹介」『外交史料館報』第 30 号、2017 年を参照。なお本稿では小笠原諸島の名称に関し、幕末期の文献に登場する無人島、ボニン諸島等ではなく小笠原諸島に一元化して記述する。

⁽²⁾ この地名の由来について、鯨波は「ここで海上遙かに潮を吹く鯨の群を眺めんこと」だとされ、また稲鯨は「稲を取ったり、

- 鯨を捕ったりという半農半漁部落からの命名だと解されている。小林存『新潟県常民文化叢書 第二編』高志社（新潟県）、1950年、171頁。北は北海道（アイヌ）から南は沖縄まで日本各地の「鯨・イルカの民俗」に関する論考を収録した著作として、谷川健一編『日本民俗文化資料集成 第18巻』三一書房、1997年がある。
- (3) 川澄哲夫『黒船異聞 日本を開国したのは鯨だ』有信堂、2004年、34頁。全盛期のアメリカ捕鯨は一航海大体3、4年で、鯨油で船倉が一杯になると途中の港で売却し、さらに捕鯨を続け基地に戻るのが一般的であった。中浜博『私のジョン万次郎』小学館、1991年、185頁。
- (4) 日本でも「抹香鯨は」肉味佳ナラスト雖トモ油質ノ佳良ニシテ其効用ノ多キ鯨中此右ニ出ツルモノナシ」と評された。それ故、「此鯨ハ之ヲ捕フルコトハ利益最大ナリ宜ベナリ欧米各国ノ捕鯨船多ク本島ニ繫泊スルヤ遠洋ノ航海ヲ休養シ薪水食料ノ欠乏ヲ補充シ水夫漁者ノ全力ヲ貯ヘ以テ我国目前ノ大利ヲ収獲シ去ルナリ」と島司小野田元熙は論じている。東京府小笠原島庁編『小笠原島誌纂』1888年、405-407頁。
- (5) 幕末以降の捕鯨史については、これまで多くの優れた先行研究、資料集の蓄積がある。たとえば渡邊洋之は1943年までの捕鯨史の時期区分を試みる中で、ジョン万次郎、平野廉蔵らが活動した時代を含め1896年までを第Ⅰ期「網取り式捕鯨の衰退とアメリカ式捕鯨の試みの時期」、ついで1897-1908年を第Ⅱ期「ノルウェー式捕鯨が導入される時期」等々としている（渡邊洋之『捕鯨問題の歴史社会学』東信堂、2006年、第1章）。「アメリカ式捕鯨」とは、帆船を母船とし鯨を発見すると母船から小型の捕鯨艇（ボート）を降ろし、鯨の背後から網をつけた手鉈や捕鯨銃を打ち込む漁法であり、「ノルウェー式捕鯨」とは、動力船を用い、甲板に捕鯨砲を設置した砲殺法による捕鯨と定義される。そして一般的には、ノルウェー式捕鯨の採用を画期として「近代捕鯨」の成立と解されている。なお、『大日本水産会報』（第226-229号、1901年）には、水産技師松牧三郎による「諸威式捕鯨実験談」が掲載されている（谷川健一編、前掲書、347-368頁）。
- (6) 小笠原諸島海域を含む「ジャパングラウンド」における19世紀太平洋での捕鯨については、森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会、1994年、石原俊『近代日本と小笠原諸島—移動民の島々と帝国』平凡社、2007年等を参照。
- (7) 石原俊、前掲書、110頁、119頁。ただし最初の定住者については、彼ら自身の自発的行動とみる「定説」の他に諸説がある。たとえば『小笠原要覧』（東京府、1929年、120頁）は、彼らは当初シャルリン島に移住するつもりであったが、はしなくも小笠原諸島に漂着したと述べ、またクラマー・スコットは、彼らは初代駐ハワイ英総領事R・チャールトンが送り出した開拓団であったと指摘する（「アメリカと小笠原群島の遭遇史」『小笠原研究年報』第36号、2013年、20頁）。
- (8) 万次郎からの聴き書きの代表的なものとして、川田維鶴撰『漂異紀略—付研究河田小龍とその時代』高知市民図書館、1986年。
- (9) 藤井哲博『小野友三郎の生涯』中公新書、1985年、72頁。
- (10) 安岡昭男『小笠原島と江戸幕府の施策』岩生成一編『近世の洋学と海外交渉』巖南堂書店、1979年、322頁。
- (11) 中濱東一郎『中濱東一郎伝』富山房、1936年、91頁。ジョン万次郎の上記略伝も基本的に本書に依拠。
- (12) 川田維鶴撰、前掲書、66頁。
- (13) 万次郎と沖縄との関係については以下を参照。仲地哲夫「ジョン万次郎と豊見城」豊見城村教育委員会村史編纂室編『豊見城村史 第9巻文献資料編』豊見城村役所、1998年、神谷良昌「琉球に上陸したジョン万次郎」『土佐史読』第257号、2014年等。また琉球新報社『われら黒潮民族』1992年、219頁は「小渡浜は日本開国の地」であり、また摩文仁にとってジョン万次郎の存在は「闇を払う救いの「光明」だと評する。
- (14) 石原俊「忘れられた〈植民地〉—帝国日本と小笠原諸島」『立命館言語文化研究』第19巻第1号、2007年、60頁。また石原は、「万次郎にとって小笠原諸島は米国で学んできた航海術・捕鯨術・測量術など、海における帝国の軍事的諸技術を試す実験場であった」と指摘する。「海賊から帝国へ—小笠原諸島における占領経験の歴史社会学・序説」ダニエル・ロング編著『小笠原学とはじめ』南方新社、2002年、241頁。
- (15) 川澄哲夫編『中濱万次郎集成』小学館、1990年、812頁。
- (16) 同上、71頁。大槻盤溪は北越平野家とも親交があったが、この点については註(34)を参照。
- (17) 戸羽山瀚編『江川坦庵全集』巖南堂書店、1979（初版1954）年、96頁。
- (18) 同上、121頁。こうした海防政策の見直しの中で、幕府は天保13(1842)年に「異国船無二念打払令」を改める一方、江戸湾警備体制の再構築と全国的な海防強化に着手する。松尾晋一『江戸幕府と国防』講談社、2013年、189-190頁。
- (19) 同上、資料3頁。同じ天保末期、高島秋帆もオランダ人ニーマンから捕鯨銃法を伝授されるが、これも砲術と捕鯨を結びつける動きの一つであった。高橋美貴「漁業」『岩波講座 日本歴史、第13巻近世4』岩波書店、2015年、161頁。
- (20) 森弘子・宮崎克則『鯨取りの社会史』花乱社、2016年、182頁。清準は文化8(1811)年、藩に上書を提出しロシアの南下に危機感を示しつつ捕鯨の軍事的メリットを説いている。高橋美貴、前掲論文、160頁。
- (21) 川澄哲夫編、83頁。
- (22) 戸羽山瀚編、前掲書、163頁。
- (23) 同上、79-90頁。
- (24) 仲田正之『江川坦庵』吉川弘文館、1985年、203頁。
- (25) 戸羽山瀚編、前掲書、83頁。
- (26) 以上二点については以下を参照。土居良三『軍艦奉行木村撰津守』中公新書、1994年、76頁。戸羽山瀚編『江川坦庵全集

- 別巻一』吉川弘文館，1979（初版1954）年，372頁。咸臨丸のアメリカ人顧問の万次郎に対する高い評価については、George M. Brooke Jr., *John M. Brooke's Pacific Cruise and Japanese Adventure, 1858-1860*, University of Hawaii Press, 1986 を参照。
- (27) 中濱東一郎，前掲書，196頁。
- (28) 中濱博，前掲書，203-206頁。
- (29) 田中弘之『幕末の小笠原一欧米の捕鯨船で栄えた緑の島』中公新書，1997年，195頁。
- (30) 戸羽山瀚編，前掲書，475頁。
- (31) 大木金平編『北蒲原郡史 第三巻』蓮池文庫，1937年，319頁。
- (32) 森弘子・宮崎克則，前掲書，80頁。
- (33) 坂口仁一郎『北越詩話 巻六』目黒甚七刊，1918年，655頁。また近年の論考として以下も参照。帆刈喜久男「村松浜平野氏の文化」『おくやまのしょう』第27号（中条町郷土史研究会，2002年）。
- (34) 高橋亀司郎「村松浜の平野安之允〔丞〕家のこと」『おくやまのしょう』第11号，1986年，66頁。上記引用文中の「勘察加」については，裏付けとなる資料は未見。6代安之丞（世秀，号橘堂）の墓碑の撰文は大槻磐溪，書は高島秋帆であるが，このことも平野家の文人気質を物語るものといえよう。
- (35) 中条町史編さん委員会編『中条町史 通史編』2004年，590頁。
- (36) 新潟県編『新潟県史 資料編十二 幕末編』1984年，265頁。平野家の財力，歴代当主の特徴については，渡辺孝行の「村松浜『平野家』に関する覚書」（1-4）が，地方文書をふまえた堅実な研究である。『蒲原』67-70号，1984-1986年。
- (37) 牧田利平編『越佐人物誌 中巻』野島出版，1972年，780頁。
- (38) 川澄哲夫編，前掲書，715-726頁。
- (39) 村松浜郷土史愛好会編『村松浜郷土史』2010年，171頁。本書には会田泰一郎「平野廉蔵氏のこと」と題する貴重な短論も収められている（171-175頁）。
- (40) 藤井哲博，前掲書，82頁。
- (41) 平野満「文久年間の小笠原開拓事業と本草学者たち」『参考書誌研究』第49号，1998年，9頁。
- (42) 渡辺孝行「村松浜『平野家』に関する覚書〔その4〕」『蒲原』第70号，1986年，69頁。鬼舞の伊藤家の持船伊栄丸は国立歴史民俗博物館の展示で紹介されている。伊藤家は18世紀後半に入り廻船を所有し19世紀中ごろには8,9隻の持船があり，幕末期からはその利益を農地集積にも投入するなど越後でも最大規模の廻船主であった。田邊幹「日本海海運がもたらした変化—『北前船』の時代」『歴博』202号，2017年5月，17-18頁。
- (43) 同上，69頁。
- (44) 川澄哲夫編，前掲書，207頁。
- (45) 阿部樸齋「豆嶋行記」は当初，小花作助『小笠原島要録 第4巻 明治11年12月より13年11月終』小笠原諸島史研究会（代表鈴木高弘）2007年の付録として紹介された。その後，鈴木は本記録の改訂版を以下の形で発表している。「小笠原諸島の回収事業における阿部樸齋—（復刻史料）阿部樸齋著『豆嶋行記』『紀要』（専修大学附属高等学校）第31号別冊，2010年12月，26頁。
- (46) 鈴木高弘，前掲論文，71頁。
- (47) 田中弘之「幕末の小笠原島民をめぐる領事裁判—いわゆるホーツン事件について」『駒沢史学』23号，1976年，83頁。
- (48) 同上，64頁。
- (49) 石原俊，前掲書，209頁，211頁。
- (50) 戸羽山瀚編，前掲書，373頁。
- (51) 中濱博，前掲書，206-207頁。
- (52) 戦後つとに万次郎に関心を寄せた鶴見俊輔は，帰国後の万次郎は幕府直参となり海軍教授所教授となり，維新後も開成学校教授となったが，「通訳と翻訳」が主たる仕事で，結局「徳川幕府と明治政府とは万次郎の見識と能力とを生かすことなく終わった」と論評する。『ひとが生まれる—五人の日本人の肖像』筑摩書房，1972年，59頁。
- (53) 中濱東一郎，前掲書，347頁。
- (54) 中条町史編さん委員会編，前掲書，700頁。
- (55) この間の新発田藩内部の錯綜した動きについては，新発田市史編纂委員会編『新発田市史 下巻』1989年，第1章を参照。
- (56) 村松浜郷土史愛好会編，前掲書，178頁。同書の冒頭で村松浜区長渡辺勝義（当時）は，「残念ながら戊辰戦争を境に，平野家をはじめ多くの旦那衆が没落」した事実と言及している。
- (57) 1867年のアメリカ「油地方ヨリ運出」された量は，計366万9123樽，翌1868年のニューヨーク港からの輸出は計5259万9483ガロンであった。このうち最大の輸出先港はプレーメン857万8075ガロン，ついでマルセイユ826万9600ガロン，アントワープ688万6077ガロン，キプロータル及マルタ428万9017ガロン等となっている。日本向け輸出は1866年2000ガロン，67年8000ガロン。大島圭介明治7年報文『山油編』開拓使刊，1879年，35頁。
- (58) 新潟県，前掲書，804頁。
- (59) 同上，802頁。こうした北越の採油ブームの一端については，中条町史編さん委員会編『中条町史 資料編近現代第4巻』

1989年, 61-65頁を参照。

- (60) 黒川村役場村誌編纂委員会編『黒川村誌』1979年, 221-222頁。「外国人雇入鑑4」(外務省外交史料館所蔵)によれば、シングルトンは八代謹之助らを雇主として「越後国新潟県管内黒川村石脳油湧出し場所探査」のため、明治6(1873)年3月訪越した。「長崎在住の英人の医師シンクルトン」の黒川来訪を新潟県発行の「先触状」(通行通知書)に基づき明治6年と特定する一方、岩佐三郎は「石油につきて多少の知識」はあったかもしれないが、彼による採油は「勘(?)」で示した位置がたまたま成功したということであろう」と指摘する(「お雇い外国人ライマンと、むかし日本」『石油』開発(2)『石油の開発と備蓄』1996年12月, 43頁)。さらに齋藤俊彦は、外務省外交史料館所蔵資料「外国人内地旅行関係雑件2」に依拠しつつシングルトンの新潟訪問を明治6年3月、往復60日間の通行証によるものと指摘する(『人力車』産業美術センター, 1979年, 26頁)。シングルトンが試掘した「臭水油坪跡」は1992年に新潟県の天然記念物、1994年に国の史跡に指定、それを受けてその地に「シングルトン記念館」が建設された。胎内市教育委員会作成小冊子『日本最古の「石油」』2013年。
- (61) 長岡市史編纂委員会編『長岡市史』1931年, 738頁。
- (62) 門馬豊次『北越石油業発達史』鉱報社, 1902年, 135-136頁(本書の複製版として『明治前期産業発達史資料 別冊72(2)』1970年がある)。
- (63) 井口東軸『現代日本産業発達史II 石油』交詢社出版, 1963年, 18-20頁。
- (64) 函館市史編さん室編『函館市史 通説編第2巻』, 1990年, 1058頁。
- (65) 辻友衛編『小笠原諸島歴史日記 上巻』近代文藝社, 1995年, 149-183頁より。辻は「あとがき」において、本書は「私が所有している資料の中から取捨選択し、ダイジェストして日付順に編纂したものである」とあり、「引用文献があまりに多数」のため出典は明記していないと述べている。
- (66) この点に関連し、片岡千賀之・亀田和彦「明治期における長崎県の捕鯨業—網取り式からノルウェー式へ—」『長崎大学水産学部研究報告』93号, 2012年3月, 102頁に、一時2百隻を超えたアメリカの北太平洋及び北氷洋捕鯨船は、明治10年代には20~40隻に減少したとのデータが紹介されている(出典は柏原忠吉「九州鯨獵ノ盛衰ニ就テ」『大日本水産会報報告』第116号, 1891年)。
- (67) この間の状況を石原俊, 前掲書, 287頁はこう描写する。「(1870年代頃から)捕鯨船の活動が次第に減退する中で、小笠原諸島の『外国』の出身者(の子孫)たちも、北太平洋・オホーツク海方面に向かうラッコ猟船に銃手などとして雇われるようになっていった。」
- (68) 辻友衛編, 前掲書, 251頁。
- (69) 明治初期, 国際的に捕鯨が衰退期に入っていた中、日本では具体的な成果をあげるには至らなかったが、小笠原諸島を漁場とするいくつかの捕鯨の試みが散発的になされた。その代表例が元高松藩儒医藤川三溪であった。藤川の事蹟については以下を参照。桑田透一『海の先覚者藤川三溪伝』水産社, 1940年, および渡辺茂雄『四国開発の先覚者とその偉業<第四集>』非売品, 四国電力株式会社, 1966年, 同書第1章に「讃岐の生んだ海の大先覚者 藤川三溪」。
- (70) 当時の捕鯨状況については田中宏『日本の水産業 大洋漁業』展望社, 1959年, 大洋漁業80年史編纂委員会編『大洋漁業80年史』1960年, 等参照。
- (71) 青野正男『小笠原物語』私家版, 1978年, 129頁。なお青野の父親青野正三郎, 鍋島喜八郎ら6名を専務取締役とする小笠原捕鯨株式会社が明治40(1907)年5月, 父島大村で設立された(資本金1万5000円)。『東京法人要録』(国立国会図書館マイクロフィルム 85-252, 157コマ)
- (72) 同上, 130頁。
- (73) 辻友衛編, 前掲書, 340頁。
- (74) 大洋漁業80年史編纂委員会編, 前掲書, 年表, および国土交通省都市・地域整備局特別地域振興官『平成十七年度 小笠原諸島の自主的発展に向けた歴史・文化探訪観光開発基礎調査報告書』90-93頁(公益財団法人小笠原協会所蔵)。

付記

本稿執筆に際しては、2015-2017年度科研費基盤研究B(課題番号2028411, 代表・早瀬晋三教授), ならびに2016-2017年度科研費基盤研究B(課題番号16H05679, 海外調査, 代表・山本まゆみ准教授)からの助成を受けた。記して謝意を表したい。また貴重な資料・文献・情報等をご教示下さった各地の関係諸機関や個々の方々に対しても心よりの感謝を申し上げたい。